

---

# 殺人女と貯金男

京本 20

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

殺人女と貯金男

### 【Nコード】

N0101K

### 【作者名】

京本20

### 【あらすじ】

ある事件を元に脚色した物語

私の名前は刹那

人を何人も殺してきた。

悪いなんてこれっぽっちも思わない。

・

幸せになる為には、金が必要だ。

体にブランド物の品をまとい、美容に金を掛けなければ、女としての幸せは存在しない。

女として男からチャホヤされるのが最上の喜びであるからだ。

私は、その為には手段を選ばない・・・

私が金を得る手段をこうだ！

結婚紹介サイトに登録して、完璧な女を演じて男をカモル  
頃合をみて男を練炭で自殺に見せかけて殺し金品を奪う。

そして通帳と暗証番号を奪い全財産を頂く！！

この暗証番号は比較的簡単にわかる。

要は、世間知らずの馬鹿な男をターゲットにすれば良いのである。

馬鹿な男は、直ぐに女の言葉に騙される。

しかも、騙される男に限って暗証番号を生年月日に設定していたりする  
のである。

盗んでくれと言っているようなものである。

そうして、私は何人もの男を手を掛けたのである。

そして今日もいつもの様に、ターゲットを探す。

新しいターゲットは、会社員35歳年収350万  
平均の下くらいだろうか、

でも構わない。

この男の言葉使いは、いかにも世間知らずで馬鹿である。  
女心の一切もわかっていない。

普通の女ならこんな馬鹿な男の相手は絶対にしない。

趣味もツマラナイ男であり、付き合う側のメリットは何も無い。  
ただ、仕事ばかりを忠実にしてきた貯金男である。

ははは（笑

私にとっては貯金箱か・・・

直ぐに殺して、財産をむしりとってやる。

・  
・  
・  
私は頃合をみて、いつもの手口で、料理を作り男の家に行く。  
話の流れをカレーという話題にもっていき、自然と男の自宅にお邪魔する。

「ここで刹那ちゃんからのワンポイントアドバイス

男は、世間の常識である肉じゃがが好きでない。

と、いうのも肉じゃがが騒がれたのは、昭和の中盤生まれの世代の  
意見であり。

現代は、洋風のカレーやハンバーグが圧倒的に人気なのだ。

男をゲツチュロしたい純情女さん。料理を作るならカレーやハンバー  
グですよー!!

ぴゅーーーーーーどくん!!!

大きな爆音と共に一瞬視界が光に包まれた!!

「ななな??なにが起きたの??

私は誰かに何かを話していた気がするが・・・

ネルネル・・・

??

なぜ、ネルネルという言葉が浮かぶのか?

ーさん

せーさん!

刹那さん！！！！

気が付くと目の前に、貯金男が居た。

そうだった・・・料理である。仕事である。  
私は我に帰る。

だが、玄関から男は家に入ろうとしない。  
男は深いため息をついている。

「ごめんなさい！僕は刹那さんに嘘をついていました！  
会社員なんて肩書きは全部嘘でフリーターなんです。  
年収も100万あるかないかです。」

男は私に真底惚れてしまったらしく、嘘をついたことを悔やんで懺悔してきた。

懺悔する男の情けない顔を見るうちに完全に私の戦意は喪失した。

その喪失の中で肩の力が抜けけたのだろうか。

私は昔のことを思い出していた・・・

¥

¥

¥

私は、最初から人を殺したいと思って、結婚サイトに登録したわけではなかった。

普通の一般人女性と同じようにサイトを利用していただけである。  
だが男から相手にされずに、つい  
自分を良く見せようとして、嘘を書くようになった。

それが私を狂わせたのかもしれない。

男達は、嘘を書くと前よりもチヤホヤしてくれた。

その快感がたまらなくて、嘘ばかりを語るようになっていった。  
そうしていつの間にか、トークが饒舌になり金持ちの男を捕えまた。

だが、金持ちの男はろくでも無い男だった。

女遊びや浮気ばかりしていて、ケチで金にも汚い。

いくら努力して尽くしても愛されたり求められたりしない。

私の事など直ぐに飽きてしまったかのように捨てた。

私は、この時、普通の人には無いであろう殺意を肯定している自分に気付いた。

結婚紹介サイトなど行かなければ・・・

嘘をつかなれば・・・

別の人生を歩んでいたかもしれない・・・

・  
・  
・

「うわ~~~~ごめんなさ~~~~い

気が付くと貯金男は泣いていた。

それほど嘘をつくのが苦しかったのか？

私には判らない。

人をそこまで好きになったことなどないのだから・・・

この男が羨ましい。

なぜだが共感する。

気が付くと私は、この男に優しくしていた。

料理を作ったり普通にデートしたりと楽しい日々を送った・・・。  
自分が犯罪者であることを忘れたかのように・・・。  
世の中にマトモ男が居ると知ったから、男に対する過剰な殺意もど  
こか行ってしまったのかもしれない。

・  
・  
・

「私が罪を償わず幸せになつた事が羨ましいか？

恐らく、今この時点で羨む人間等いないだろう。

だが、これを読んでいる君たちは大事なことを忘れていないか？

私は人を殺し家業で多額の金を手に入れている。

その金額は1億円以上である。

これだけ金があれば、海外に逃げて時効を待つことができるのである。

さあて、何処に逃げようか・・・

どうせなら海の綺麗な海岸沿いに住みたいな。

日本語もある程度使えてる物価も安い所・・・モルディブ島がいいな・・・

私は、巧みな話術で彼を騙してつれていく。

彼は私にとっては従順なるシモベであり友であるから、旅には欠かせないのだ、

・  
・  
・

私と彼は身支度を整得る為に、買い物に出かけていた。

一通りの物を買って揃えているその時

「君が・・・殺したのは5人である。

彼が突然、言い出した。

私は、一瞬、耳を疑がって聞き返してみた。

彼は、口元をニヤリとさせ、淡々と語りだした。

「俺は本当は君してきた事を全て知っている・・・  
だが、俺は全てを受け入れている。  
理由は判らるだろう。」

それは、君を愛しているからに他ならない・・・

今まで何も言わなかったのは、君が僕への気持ちの本物かどうかを試したかったからさ。

でも今日、やっとわかった・・・

君と僕とは相思相愛の仲である。

君となら間違いは無い。

さあ！行こう！！僕達は永遠に結ばれ続けて、死ぬまで一緒だ。

君が死ぬ時は僕も死ぬ・・・

僕が死ぬ時は君も死んでくれるよね・・・

彼の表情は不気味だった。

その表情は、まるで私が男に殺意を抱く時の表情とそっくりであった。

重すぎる思いに

私は死の恐怖を感じた。

彼を連れて行くのは、「ヤバイ！」

そう判断した私は、

恐怖心に震えながらも何とか、その日をやり過ごした・・・

家に帰り私は後悔していた・・・

今まで付き合う男はカモで住所を教えたことはなかったからヤバクなったら直ぐに縁を切ることができた。

でも今回は違う。

私の方から彼に心を許してしまって、住所を教えてしまっている・・・

・  
普通の男なら断り切る自信はあるが、  
彼のようなイカレタイプはどうやって縁を切ったらいいのか判らない。

下手に断れば、彼の怒りを買います。  
私の犯罪をばらされるかもしれない。最悪、殺されてしまつかも  
れない。

私が考え込んでいると、携帯が鳴った。

彼である。

私は恐る恐る電話に出ると・・・

「実は今、君の家の前に居るんだ。

モルディブ島移住の急用なんだ。空けてくれないだろうか・・・

彼からの電話であるが、いつもと違う。

彼は、気弱な受身タイプの人間である。

自分からアクションを起こすなんて滅多にしないはずである。

第一、彼は急用の時は、何時もメールを先にするはずである。

私は、嫌な予感がした。

上手く取り繕ったつもりだったけど、気が動転していたから、騙  
せた自信がない。

そもそも、どうして、彼は私が人を殺した事を知っているのか・・・  
出合っただけでも長く無い筈なのに・・・私の家をあら捜ししたと  
いうことなのか。

ますます恐怖が襲ってくる。

私は、おそるおそる、玄関を覗く・・・

「こ、これは、マズイことになった・・・」

~~~~貯金男の目線~~~~

僕は間がさしたのかもしれない。

悪いこととは思ったけど、なぜだか判らないけど・・・

彼女の過去を知りたくてつい、パソコンを開いて見てしまったのだ。

そしてパソコンを調べて彼女の真実を知ってしまった。

僕は、こんな現実を受け入れたくなかった。

とても苦しんだ。

裏切られたと思った。

だけど、彼女への思いは断ち切ることができなかった。

僕は彼女とズルズルと付き合い続けた。

彼女への思いを断ち切らなければ、前向きに生きられない・・・

だけどある日、彼女は、僕に決断をさせるキツカケを与えた。

海外に逃げるといふ話を彼女にされた時、僕は自分が彼女に求められていることを実感することができた。

彼女にとって僕が大事な存在であるなら、僕は、それだけで十分満足だった・・・

その時僕の中で何かが弾けた・・・

満足しすぎたのか、もう彼女が居なくても大丈夫・・・。

なぜだか、そんな考えに至っていたのである。

僕は彼女を奈落の底に突き落とす決意をした。

僕は彼女と最後のデートを楽しんだ後、警察に通報した・・・

-----

後書き

うっっん。

最後の男の心理は新鮮そうを書いてみたのですが理解できる人居ますか？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0101k/>

---

殺人女と貯金男

2011年1月28日14時51分発行